

吉備津神社 七十五膳据神事の七十五の起源についての考察

丸谷憲二

1 はじめに

吉備津神社に**七十五膳据神事**という献饌(けんせん)行事がある。備中国内の諸郷から新穀をはじめとする産物を一宮である吉備津神社に献納し感謝するお祭りとして説明されている。300メートルに及ぶ廻廊の端にある御供殿(ごくうでん)から、**七十五膳**や神饌、神宝類、奉供物を前日までに準備し、それぞれの膳には春は白米、秋は玄米を蒸して円筒形の型にはめて作った御盛相(おもっそう)を中心に鯛や時節の山海の珍味で四隅をはり柳の箸がそえてある。



七十五という数について、① 往古の最大吉数八十一の次の吉数である七十五説。② 神座数が七十五あり一膳ずつ献供説。③ 村落数が七十五あり各村々から一膳ずつ献供説 等がある。吉備津神社では、この神事は祭神の温羅を退治し凱旋した時の模様を加味しているとし、村落数説がもっとも有力な説としている。この七十五の起源について、トヨタ自動車の品質管理の手法「なぜなぜ分析」を使用して考察する。なぜなぜ5回である。なぜを5回繰り返すだけの手法である。

2 第1のなぜ、「最古の七十五膳据神事 諏訪大社の御頭祭」

諏訪大社の御頭(おんとう)祭の神饌(しんせん)は「**75 頭の鹿の頭**」であった。他に猪の頭、兎の串刺し等が神長官守矢資料館に展示されている。



兎の串刺し

「75 頭の鹿の頭」

2.1 神長官守矢資料館

守矢史料館(長野県茅野市宮川)は、鎌倉時代からの守矢文書を保管・公開する史料館である。守矢家は中世より諏訪神社上社の神官の一つである「神長官(じんちょうかん)」を明治時代まで勤めている。

2.2 御頭(おんとう)祭の「75頭の鹿」

諏訪神社上社の重要祭礼は御柱祭と「御頭(おんとう)祭」である。旧暦3月の酉の日に行われていた。展示資料は、江戸後期の菅江真澄のスケッチである。古来からの諏訪神社の祭礼の形態を伝える貴重な展示である。「鹿食免」のお札も展示されている。壁に**75頭の鹿と猪の首**が並んでいる。**洩矢神**は狩猟神である。『脳和』(のうあえ)とは鹿の脳と肉を紙に包んで熱湯にひたして和えたもの。御頭祭は諏訪大社で最も重要な祭祀であり、**守矢氏**によって執り行われてきた。



菅江真澄のスケッチ



『脳和』(のうあえ)



「鹿食免」のお札

2.3 年内神事七十五度の秘法

守矢神長家には、一子相伝として「**年内神事七十五度の秘法**」が伝授されていた。「神長官守矢資料館のしおり」に守矢早苗氏が記録している。要点は、出雲の国の国譲神話とは別の国譲神話が伝来している。室町時代初期の「諏訪大明神絵詞(えことば)」に記録されている。建御名方命(たけみなかたのみこと)以前にこの地を支配していた先住民族、洩矢神は負けてしまった。「神長守矢氏系譜」には**洩矢神**が**守矢家の祖先神**とある。

建御名方命の子孫である諏訪氏が大祝という生神の位に就き、**洩矢神の子孫の守矢氏が神長(神長官)**という**筆頭神官の位**についた。この一体化した体制が古代から中世と続いていた。

2.3.1 ミシャグチ神

諏訪大社の祭政体はミシャグチ神と呼ばれている。自然万物に降りてくる精霊と説明される。一年に「**七十五度の神事**」が行われていた。しかし、明治5年に世襲の神官制が廃止され、一子相伝の秘法も消え「**年内神事七十五度の秘法**」も消滅した。公開されているのは、「**年内神事七十五度の秘法**」に、①ミシャグチ神祭祀法、②冬季に竪穴の御室で行われる神事の秘法、③御頭祭の時に行われる護符札の秘法がふくまれている。ここまでである。

2.4 第1のなぜ まとめ

1 回目のなぜで、

- ① 諏訪大社の御頭(おんとう)祭の神饌「**75頭の鹿の頭**」に到達。
- ② 守矢神長家の一子相伝「**年内神事七十五度の秘法**」に到達した。

3 第2のなぜ、「先住民族、洩矢神の渡来元の推定」



御旗、御矛(ほこ)、薙鎌(なぎかま)などの儀杖を先立ちに、本宮を出発した神輿は、前宮の十間廊に安置される。

神饌の前に立つ御杖柱(みつえばしら)は、檜の柱に五色の絹をたらしたもので、古くはここに御神(おこう)と呼ばれる子供を縛りつけたという。

3.1 御贄柱



祭壇の正面に御贄柱(おにえはしら)と呼ばれる柱が祭られている。菅江真澄の記した御頭祭の記録に、御神(おこう)と呼ばれる子供を「御贄柱」に押し上げ、立木に縄で縛り付けるという記録がある。御贄柱に鉄鐸を懸けて、ミシヤクジの神を降ろして神事が行われる。この神事を勤めるのは守矢家の神官である。「神長が篠(むしろ)の束を解き、篠をバラバラにしてその上に敷く。その時長さ五尺あまり、幅は五寸ほどで先のとがった柱を押し立てる。これが御贄柱である。御神(おこう)と呼ばれる八歳く

らいの子供が紅の着物を着て、この御柱に手を添えられ、柱ごと、人々が力を合わせてかの竹の筵の上に押し上げて置いた。袴を着た男が藤刀を抜き放って神長官に渡す。子供を桑の木の皮を縫り合わせた縄で縛り上げる。……そして長官の前宮で縛られた子供が解き放たれ祭りは終わる。」御贄柱とは「生贄の柱」である。かつて、子供が生贄として神に捧げられていた。贄として捧げられる鹿・兎・猪や「御贄柱」に押し上げられる子供…これが古代祭祀であり、神道の起源である。

3.2 子供の生贄 『旧約聖書』 創世記 第22章



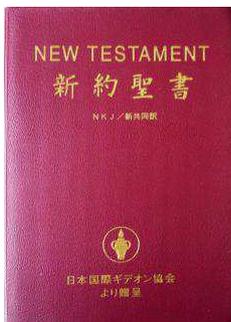
これらの事後、神はアブラハムを試みて彼に言われた、「アブラハムよ」。彼は言った、「ここにあります」。神は言われた、「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れてモリヤの地に行き、わたしが示す山で彼を燔祭(はんさい)・古代ユダヤ教で、生け贄の動物を祭壇で焼き、神に捧げた儀式。(古代中国で、柴を焼き煙を上げて天をまつることを燔柴(はんさい)という))としてささげなさい」。アブラハムは朝はやく起きて、ろばにくらを置き、ふたりの若者と、その子イサクとを連れ、また燔祭のたきぎを割り、立って神が示された所に出かけた。3日目に、アブラハムは目をあげて、はるかにその場所を見た。そこでアブラハムは若者たちに言った、「あなたがたは、ろばと一緒に

ここにいなさい。わたしとわらべは向こうへ行って礼拝し、そののち、あなたがたの所に帰ってきます」。

アブラハムは燔祭のたきぎを取って、その子イサクに負わせ、手に火と刃物を執って、ふたり一緒に行った。やがてイサクは父アブラハムに言った、「父よ」。彼は答えた、「子よ、わたしはここにいます」。イサクは言った、「火とたきぎとはありますが、燔祭の小羊はどこにありますか」。アブラハムは言った、「子よ、神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう」。こうしてふたりは一緒に行った。彼らが神の示された場所にきたとき、アブラハムはそこに祭壇を築き、たきぎを並べ、その子イサクを縛って祭壇のたきぎの上に載せた。そしてアブラハムが手を差し伸べ、刃物を執ってその子を殺そうと

した時、主の使が天から彼を呼んで言った、「アブラハムよ、アブラハムよ」。彼は答えた、「はい、ここにおります」。み使が言った、「わらべを手にかけてはならない。また何も彼にしてはならない。あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」。この時アブラハムが目をあげて見ると、うしろに、角をやぶに掛けている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行ってその雄羊を捕え、それをその子のかわりに燔祭としてささげた。

それでアブラハムはその所の名をアドナイ・エレと呼んだ。これにより、人々は今日もなお「主の山に備えあり」と言う。主の使は再び天からアブラハムを呼んで、言った、「主は言われた、『わたしは自分をさして誓う。あなたがこの事をし、あなたの子、あなたのひとり子をも惜しまなかつたので、わたしは大いにあなたを祝福し、大いにあなたの子孫をふやして、天の星のように、浜べの砂のようにする。あなたの子孫は敵の門を打ち取り、また地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう。あなたがわたしの言葉に従ったからである』」。アブラハムは若者たちの所に帰り、みな立って、共にベエルシバへ行った。そしてアブラハムはベエルシバに住んだ。以上が創世記のイサク奉獻伝承である。



3.3 何故 75 頭なのか 『新約聖書』使徒行伝 第 7 章 14 節

『新約聖書』使徒行伝 第 7 章 14 節に「ヨセフは使をやって、父ヤコブと七十五人にのぼる親族一同とを招いた。」とある。ヨセフはイサクの孫である。イスラエルの祖アブラハムからイサク～ヤコブ～ヨセフである。これが 75 という数字の初見である。イサクは神に生贄に捧げられたが、神のご加護により助けられ、そのイサクから枝分かれして増えた親族数が 75 の意味である。

3.4 耳裂け鹿と「耳裂け羊」



耳裂け鹿。神前に捧げる 75 頭の鹿の首の中に必ず一匹だけ耳が裂けたものがいる。これは神の矛にかかったと説明される。守矢史料館に耳裂け鹿が飾られている。諏訪大社の伝承では、この耳裂鹿は神の矛に（耳が）掛かった、神が供えてくれたものとしている。

『旧約聖書』 創世記 第 22 章の「この時アブラハムが目をあげて見ると、うしろに、角をやぶに掛けている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行ってその雄羊を捕え、それをその子のかわりに燔祭としてささげた。それでアブラハムはその所の名をアドナイ・エレと呼んだ。これにより、人々は今日もなお「主の山に備えあり」と言う同一である。



3.5 守屋山と「アブラハムのモリヤの地」

諏訪大社上社の御神体は裏の守屋山である。『旧約聖書』 創世記 第 22 章 2:2 神は言われた、「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れてモリヤの地に行き、わたしが示す山で彼を燔祭としてささげなさい」。と、アブラハ

ムはモリヤの地に行く。御頭祭は別名「ミサクチ祭り」と呼ばれている。ヘブライ語では、「ミ・イツァク・ティン」、「イサクに由来する」となる。地名学上も守屋山という地名からこの説は正しい。

3.6 イスラエルの失われた十支族の一支族の信濃渡來說

イスラエルの失われた十支族の一支族が信濃に渡来した。彼らはアブラハムの子孫である。諏訪の地に落ち着いた彼らは諏訪湖のほとりに安住し、裏山を神ヤハウエ・モリヤの名から守屋山と名づけ、自らもモリヤと名乗った。イサク奉獻伝承を忘れないために、御頭祭を創作した。

3.7 諏訪大社・上社の「年中神事数 75」

この75と言う数字は諏訪大社・上社の年中神事の数と一致している。

4 まとめ

2回目のなぜを「先住民族、洩矢神の渡来元の推定」とした。

御贄柱（おにえはしら）から子供の生贄に到達し、

- ① 『旧約聖書』 創世記 第22章から、イサク奉獻伝承に到達。
- ② 『新約聖書』使徒行伝 第7章14節から、イサクから枝分かれした親族数が75と解読できた。

イスラエルの失われた十支族の一支族の信濃渡来とは、ユダヤ教・キリスト教の伝来のことであり、アブラハムの子孫の渡来とまでは断定できない。

守屋山という山の名前、守矢家(中世より諏訪神社上社の神官)より、地名学として『旧約聖書』『新約聖書』のモリヤに関連した祭りとは断定する。

大山祇宮(愛媛県今治市大三島町宮浦)にも『大頭』という神事があった。『一遍上人縁起伝』に、「毎年祭祀二度、桜会と云ひ大頭と云ふ、祭毎に鹿の生贄を備ふ、正応(1288～1292)中に及て僧一遍神教に託て其礼を止むと曰へり」とある。

吉備津神社の七十五膳据神事の初見記録は永正五年(1508年)の秋季祭礼である。室町時代半ばには、その原型の行事が行われていたと志水陽子氏は報告している。諏訪大社と比較して新しい行事記録であり、諏訪大社の御頭祭の献饌行事の七十五膳という形のみを真似たものである。そして、献饌を備中内の諸郷からの新穀や産物に変更している。工夫改善である。

『白州正子の宿題 日本の神とは何か』の質問に対する回答の一つが、「神道の祭りの起源とは、渡来人の故郷の祭りの記録」である。

5 参考文献

- ①『七十五膳据神事の研究』七十五に関する全国の神事・信仰との関わりを中心に 奥村貴子
『岡山民俗 203』1995年6月
- ②『吉備津神社七十五膳据神事』志水陽子 国学院大学日本文化研究所紀要 第87号 平成13年3月
- ③『白州正子の宿題 日本の神とは何か』白州信哉 2007 世界文化社
- ④『神長官守矢資料館』<http://mummymummy.blog.fc2.com/blog-entry-43.html>
- ⑤『守矢史料館』<http://igneousfatuus.fc2web.com/page/diary/kansou/touhoumeguri19.html>
- ⑥『倭国、大和国とヘブライ王国』http://blog.goo.ne.jp/n_ishii517/e/
- ⑦『諏訪大社に伝わるイサク奉獻伝承』<http://www2.biglobe.ne.jp/remnant/096suwa.htm>
- ⑧『吉備国の古代製鉄と熊山遺跡出土の陶製筒型容器』丸谷憲二 平成25年5月22日

⑨『菅江真澄が見聞した「御頭祭」を読み解く』<http://yatsu-genjin.jp/suwataisya/sinji/>